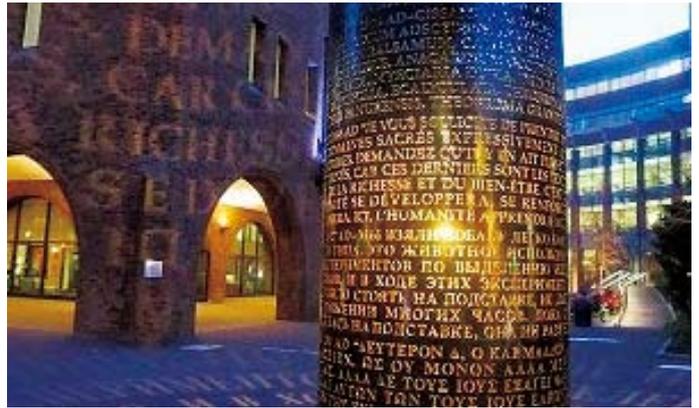




CENTER NEWS

MARCH 2015

www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp



米国・トーマス・ジェファーソン大学訪問時の写真

Contents

| | |
|--|--|
| ● 東京大学医学部分野別認証評価を終えて 2 大西 弘高 (講師) | ● 模擬患者つつじの会 5 澤山 芳枝 (特任専門職員)・孫 大輔 (講師) |
| ● トーマス・ジェファーソン大学訪問 3 北村 聖 (教授) | ● メアリー・リー先生の教育活動 6 孫 大輔 (講師)・三浦 和歌子 (特任専門職員) |
| ● フリークォーター / エレクティブクラークシップ 3 孫 大輔 (講師) | ● メアリー・リー特任教授 離任あいさつ 7 Mary Y. Lee, MD, MS, MA, FACP (特任教授) |
| ● 東京大学医学教育セミナー 4 大西 弘高 (講師) | ● 博士課程修了のあいさつ 7 東京大学大学院医学系研究科内科学専攻 医学教育国際研究センター 博士課程修了生 春田 淳志 |
| ● 医学教育基礎コース 4 孫 大輔 (講師) | ● 離任あいさつ 7 飯岡 緒美 (特任研究員) |
| ● Global Leadership Program インターンシップ報告 ... 5 山本 健 (大学院生) | ● センター日誌 / 編集後記 8 |
| ● 臨床診断学実習 (医療面接実習と共用試験 OSCE) 5 澤山 芳枝 (特任専門職員)・孫 大輔 (講師) | |

東京大学医学部分野別認証評価を終えて

大西 弘高（講師）

2月20日の東京大学医学部分野別認証評価における講評、閉会式の直後、東京医科歯科大学において「国際基準に対応した医学教育認証制度の確立」に関する平成26年度文部科学省大学改革推進事業公開シンポジウムが開催された。北村教授が、「認証評価は東大医学部に大きな変化をもたらした。全ての教授が教育に関してディスカッションし、今後改善していかなければならないという雰囲気生まれた」と閉会の挨拶で触れていたが、改めて今回の業務がやり甲斐のあることだったと感じている。

私は、この5月でこのセンターでの業務を初めて丸10年になる。その歴史の中でも、この業務は大変だった。しかし、成果が大きく、将来から見渡すと、きっと大きな節目になるのではないかという実感があった。昨日に閉会式を終えたばかりの新鮮な気持ちの中で、自分にとって、そして東大医学部にとっての振り返りの場として本稿をしたためてみたい。

何が大変だったか、何がよかったか

認証評価は、十分な自己点検評価を行い、改善点を見出し、今後の継続的な改善につなげる活動であるということは理解していた。しかし、医学部の自己点検評価を行うためには、医学部全体としてどのように評価するのかという合議が必要であり、どの程度時間をかけ、どの程度の人に関わるべきかについては、全く予想ができないままに進んでいった。

関与するメンバーは、「教授陣全体 + 教育への関与が顕著な教員」と示された。それは医学部医学科に留まらず、健康科学・看護学専攻、国際保健学専攻、公共健康医学専攻の先生方も含むという意味でもあった。2013年3月までは、医学教育国際協力研究センターは医学系研究科・医学部の組織ではなかったし、そもそも私はセンター内の医学教育国際協力事業企画調整・情報部門でJICAプロジェクト中心の人生を送っていた。医学系研究科の中核を担っておられる先生方の背景や教育への関与については、最初は全く知らなかったと言っても過言ではない。そのような私がこの仕事に関わることがよかったのか…と自問自答する瞬間もあったが、とにかくこの業務に没頭した。

認証評価全体の観点からは、とにかく全教授陣の力を結集できたということが大きい。会議を何回くらい開けば十分か、それぞれの先生方の報告書記載をどの程度下準備するかといった点については、すべて手探りであり、やりながら考えるという状況だった。報告書記載が十分にできているかについては、エリアを超えたフォーマットや用語などの統一を図ることはできても、そもそも認証評価基準を理解すること自体も簡単ではなかった。また、東京大学医学部の内部点検評価が十分かどうかについては、私がカリキュラムやシステムについてあまり何も知らなかったため、とにかく情報を集め、色んな先生方に話を聞いて進めていった。ただ、このように「手間がかかったこと」が結果的にはよかったのかもしれないと感じている。

教授陣が議論するという雰囲気は、2014年3月、6月、8月、11月と4回開催したFDにおいて醸成された面も大きい。アウトカムの制定、学生評価の見直し、カリキュラム統合、研究者育成プログラムの4つのテーマについて、しっかりと合意できたとし、これらの議論の中で、東大医学部の強み、弱みが明らかになってい

た。教育システムの完全なオーバーホールは不可能なので、改善のために「絶対に改革すべき点」を丹念にあぶり出すことの重要性も合意できていったと思われる。

国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会7回に加え、各エリアのワーキンググループの会議がそれぞれ3回ほどあり、それぞれの事前打ち合わせがある…というような状況で、公式の会議が32回、全部の会議を合わせると100回を超えたであろう。200頁ほどの報告書は、改めて読み直すと不備も多いが、ともかく「東大医学部の教授陣が総力をかけて」作った報告書になった。

次にもう一回やるとしたらどうやりたいか

自分がもし外部評価委員だったら…と想像してみる。それは、私がアフガニスタンやラオスでJICAプロジェクトに携っていた頃の専門家の立場と重なるものがある。それぞれの大学に歴史があり、現状のシステムに至った必然性がある。認証評価の目的が、医学教育の善し悪しの判定より、ピアレビュー、形成的プログラム評価の意味合いを強く持つのであれば、どのような強み、弱みがあるのかを分析し、どのような優先順位で改善するのがよいかという画を描きたくなるに違いない。だとすれば、次に内部点検評価を行う機会があったとすれば、まずは現状の強み、弱みを十分分析することから始めるべきだと思う。各エリア、そして全体でSWOT分析を繰り返すことで、改善への道筋が見えていくのではないか。

今回の認証評価を通じて、改めて最も難しいと感じたのは、東大医学部の教育目的、アウトカムに謳っている“国際的指導者”の具体像である。本当に、国際的指導者を多数輩出しようとするなら、そのための教育方法をより具体的に考える手もあるのではないか。今のところ、ロールモデルを示し、徒弟制で指導しているようにも思える。また、教員全体、あるいは学生全体がより力を合わせてその目標に向かうことはできないか、力を結集するためのスキルをもっと教育する方法はないのか。こういった根本的な点にも正面から議論を続けていってこそ、新たな高みが見えてくるのかもしれない。



▲ 開会式



▲ 実習室見学

トーマス・ジェファソン大学訪問

北村 聖 (教授)

2014年12月12日から18日にかけて米国ペンシルベニア州フィラデルフィアにあるトーマス・ジェファソン大学を視察した。米国の大学の中でも、教育熱心なことで知られ、長く学長をされていたDr. Joseph Gonella先生が先頭になって特色ある教育を行っている大学である。すぐ近くに研究や診療で有名なペンシルベニア大学があり、その大学との違いを出す必要があったのではないかと想像する。

キャンパスはフィラデルフィアの中心にあり、附属病院と隣接している。キャンパスそのものは決して広くはないものの、図書館やシミュレーションセンターなど教育関連の施設は贅沢に作られており、環境からも教育熱心なことがわかる。

医学教育の中心的課題として、米国の多くの人々は「プロフェッショナルリズム」を挙げるが、ここでは「education of empathy」が挙げられている。この点について、いろいろ説明を受け、模擬患者を使った実際の授業を見学したが、その神髄についてはもう少し自分なりに考えて紹介したい。

この教育の一環として、学生の課外活動として貧困街の「駆け込み家」での診療に同行した。市役所のすぐ近くに「駆け込み家」があり、20人くらいの母子が生活している。6時から9時ごろまで、1階のロビーで健康相談や簡単な医療活動をしている。レジデントが学

生上級生を教え、上級生が下級生を教えるスタイルで、楽しそうに教え合っていた。実際にHIV検査などを行っていた。単なるサークルではなく、正課に準ずるような位置づけで教育効果も上がっていると感じた。

病院は救急が活発な活動をしており、救急病床も40床近くあり地域の中核病院としての機能を果たしている。

ついでに、ペンシルベニア大学の小児病院CHOPを見学した。米国有数の小児病院で、組織上は大学附属であるが、実質、大学と対等なくらいに独立しているそうである。最先端の医療が展開されているが、小児病院でありすべての場所が患者である小児からの視点を考えているなあと感じる病院であった。教育の面では現場に近いところでシミュレーション教育をする方針があり、病棟で技術の練習や医療面接の練習ができるようになっていた。

訪問に際して、ご支援をいただいた野口医学研究所に深謝いたします。



▲ Gonella先生と

フリークォーター / エレクトィブクラークシップ

孫 大輔 (講師)

2015年1月から3月にかけて、当センターは医学科3年生を3名、医学科5年生を4名、研究室配属として受け入れ、研究や実習の指導にあたった。

1月28日に行われた発表会では、3名の学生が研究・実習の発表を行った。3年生の伊藤瑞貴さんは「医学教育のニーズを探る上での総合診療の重要性について」というテーマで、プライマリケアとは何か、総合診療医に求められるものとは何かを、WHOのWorld Health Report 2008のプライマリヘルスケアに関する文献等、および公衆衛生学や国際保健学の専門家などからのヒアリングをもとに考察した。3年生の田辺真生さんは「医学部生のキャリアデザイン」というテーマで、本学医学部の卒業生のうち医師・研究医以外の進路を選択した3名の方にインタビューおよびアンケートを行い、その結果をまとめた。共通していたことは自分の適性を見据えて新しいことにチャレンジする姿勢や、あらゆる経験を自分のキャリアに活かす積極性であった。5年生の大和陸離さんは「慢性疾患患者の情報ニーズと利用情報源および情報利用に関する困難」というテーマで、9名の慢性疾患患者にインタビューし、患者が求める情報ニーズ等に関してまとめた。結果として、患者によりエビデンス情報のみならずナラティブ情報も求めていること、さまざまな情報源を用いているが人により利用傾向に偏りがあること、情報の価値が人を介するものを重視する傾向にあること、などが考察されていた。

また、2～3月には4名の学生が研究・実習を行った。3年生

の近藤壮一郎さんは「良い医師になるために部活動はいかに影響を与えるか」というテーマで調査を行った。5年生の田中李樹さんは「ラオスでの医療とプライマリヘルスケア」というテーマで、実際に2週間ラオスを訪れ、都市部および地方のいくつかの病院やヘルスセンターで途上国の保健医療の実情を学んだ。5年生の平澤南波さんは「プライマリケアにおける医学用語の医療者と市民・患者間の認識ギャップ」というテーマで、約350人を対象としたウェブ調査を行い、「貧血」「ショック」などの用語に関する興味深い結果に関して考察した。5年生の天野瑤子さんは「離島・へき地医療について」というテーマで、沖縄・南大東島の太田龍一医師のもとを訪れ、離島医療の実際を見学した。

今回、当センターの3名の教員が分担して7名の学生の研究・実習指導にあたった。今後も引き続き学生の学習をサポートしていく予定である。



▲ 1月の研究発表会で発表を行った学生と指導教員

東京大学医学教育セミナー

大西 弘高 (講師)

平成 26 年度後半の医学教育セミナーは、例年のように 10 月に客員教授として着任されたメアリー・リー先生を中心に進んだ。以前、当センターの准教授でおられた武田裕子先生、平成 25 年度の客員教授だったジェフリー・ウォン先生にも登壇いただいた。

武田裕子先生には、社会的決定要因を学ぶ教育に関し、タイ、英国、米国での取り組みを紹介いただいた。地域での健康増進活動に医師が取り組む事例も紹介され、地域現場の新たな視点が開けた。

メアリー・リー先生の第 70～72 回セミナーは、カリキュラム改革、学習者評価にまつわる話題であった。タフツ大学は研究志向の強い大学であり、教育改善に対して熱心でない教員もいたが、学習者間、学習者－教員間のつながりを重視し、批判的思考や問題解決といった医療の本質に関わる教育を重視することで、結局は大きな変革を生み出すことができた。Let's discuss という共通テーマが付けられており、常に聴衆との意見交換がなされていたことが印象的であった。

第 73 回は、マサチューセッツ工科大教授で、東大特任教授でもある宮川先生とメアリー・リー先生が共にオープン教育について話されたが、非常に印象に残る講演の一つであった。誰にでもアクセス可能な MOOC (massive open online course) は、全世界で学びたい人々を刺激し、大勢が共に学べば大きなインパクトを生じさせることができる。教育コンテンツをどんどん外に打ち出していくことで、新たな流れを作っていくため、学生も大いに刺激になるとコメントしていた。

ジェフリー・ウォン先生は、プロフェッショナリズムについてであった。潜在的カリキュラムの重要性、そして自分が最初に診た患者からの経験が今の自分につながっているというエピソードが印象的であった。



▲ 第 73 回セミナーでの宮川先生とリー先生

| | | | |
|---------------------------------|---|---------------|-----------------|
| ○第 69 回 | 9 月 25 日 (木) | 18:00 ~ 19:30 | 医学図書館 3F333 会議室 |
| 講演者: | 武田 裕子 先生 順天堂大学医学部 医学教育研究室 教授 | | |
| テーマ: | 「健康の社会的決定要因を学ぶ地域医療教育」 | | |
| ○第 70 回 | 10 月 30 日 (木) | 18:00 ~ 19:30 | 医学図書館 3F333 会議室 |
| 講演者: | メアリー・リー 先生 米国 タフツ大学医学部 教授 | | |
| 東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 特任教授 | | | |
| テーマ: | 「タフツ大学のカリキュラム改革とその意義」 Tufts' Curriculum Reform and Implications for Medical Education | | |
| ○第 71 回 | 11 月 28 日 (金) | 18:00 ~ 19:30 | 医学図書館 3F333 会議室 |
| 講演者: | メアリー・リー 先生 | | |
| 東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 特任教授 | | | |
| テーマ: | 「Let's Discuss!」医学部学生の学習者評価: 認証評価に向けて」 「Let's Discuss!」 Student Assessment: Do we know students are learning what we think we are teaching ? | | |
| ○第 72 回 | 12 月 18 日 (木) | 18:00 ~ 19:30 | 医学図書館 3F333 会議室 |
| 講演者: | メアリー・リー 先生 | | |
| 東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 特任教授 | | | |
| テーマ: | 「Let's Discuss!」学習者評価 その II: 学習者評価を継続的改善にどう活用するか」 「Let's Discuss!」 Assessment Part II: How do we use student assessment for continuous improvement ? | | |
| ○第 73 回 | 1 月 16 日 (金) | 18:00 ~ 19:30 | 医学図書館 3F333 会議室 |
| 講演者: | 宮川 繁 先生 マサチューセッツ工科大学 教授 / 東京大学大学院医学系研究科 特任教授 | | |
| メアリー・リー 先生 | | | |
| 東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 特任教授 | | | |
| テーマ: | 「Let's discuss! Open Education and Its Implications for Medical Education」 | | |
| ○第 74 回 | 2 月 2 日 (月) | 18:00 ~ 19:30 | 医学図書館 3F M1 室 |
| 講演者: | ジェフリー・ウォン 先生 米国サウスカロライナ医科大学教授 | | |
| 平成 24 年度東京大学医学教育国際協力研究センター特任教授 | | | |
| テーマ: | 「医学教育においてプロフェッショナリズムを進めるために」 Promoting Professionalism in Medical Education | | |
| ○第 75 回 | 2 月 27 日 (金) | 18:00 ~ 19:30 | 医学図書館 3F333 会議室 |
| 講演者: | メアリー・リー 先生 | | |
| 東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 特任教授 | | | |
| テーマ: | 「アクティブラーニングを授業や臨床教育に巻き込むための効果的戦略」 | | |

医学教育基礎コース

孫 大輔 (講師)

2011 年度から始まった医学教育基礎コースは、本学医学部の FD の一環として、主に新任の医学部教員や附属病院の教育担当スタッフを対象に、実践的な教育法について学べるコースを実施している。2014 年度は表のように全 10 回のセッションを予定し、一通り受講することで教育理論の基礎から効果的な教育実践法、応用的なテーマまで学べるようになっている。

内容の一部を紹介すると、第 5 回の北村教授による「研究倫理の教育」では、不正論文の実例と不正が起きる背景などについて

| | 日時 | テーマ | 講師 |
|--------|------------|------------------|----|
| 第 1 回 | 2014.4.22 | よい教育者になるために | 大西 |
| 第 2 回 | 2014.5.13 | 魅力あるレクチャーの方法 | 北村 |
| 第 3 回 | 2014.6.17 | インストラクショナル・デザイン | 孫 |
| 第 4 回 | 2014.7.15 | カリキュラム開発概論 | 大西 |
| 第 5 回 | 2014.9.16 | 研究倫理の教育 | 北村 |
| 第 6 回 | 2014.10.21 | 多職種連携教育 (IPE) | 孫 |
| 第 7 回 | 2014.11.25 | 学習者評価とアウトカム基盤型教育 | 大西 |
| 第 8 回 | 2015.1.13 | プロフェッショナリズムの教育 | 北村 |
| 第 9 回 | 2015.2.24 | コミュニケーションの教育 | 孫 |
| 第 10 回 | 2015.3.17 | 臨床推論の教育 | 大西 |

解説があり、不正を防ぐための方策について、研究倫理・論文作成技法の教育の徹底や不正論文に対する懲罰基準の明確化などが考察された。第 6 回の孫講師による「多職種連携教育 (IPE)」では、ビデオによるケースを見て、何が専門職間の連携・協働を阻害し、どのような要因やコンピテンシーが連携・協働をうまく行かせるのか、海外の IPE コンピテンシーの枠組みを参考にしながら学んだ。第 7 回の大西講師による「学習者評価とアウトカム基盤型教育」では、アウトカム基盤型教育が重視されるようになった背景、カナダの CanMEDS の 6 項目、米国 Institute for International Medical Education (IIME) の Global Minimum Essential Requirements の 7 項目などの教育アウトカムが紹介された。

毎回 10～20 名前後の参加があり、学内のみならず学外の教員、多職種が参加している。テーマに関心のある方、新たに教育担当になった方などの積極的な参加をお待ちしている。



▲ 第 6 回「多職種連携教育 (IPE)」でのグループワーク

Global Leadership Program インターンシップ報告

山本 健 (大学院生)

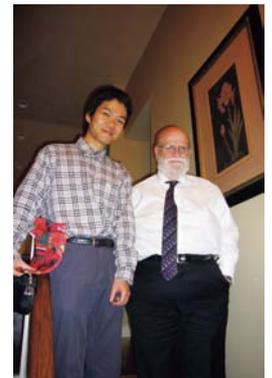
GLP (Global Leadership Program) は2010年に文部科学省の資金で開始されたプログラムであり、東京大学大学院が運営を行っている。そのミッションは“To develop a community of transformational leaders who will amplify the well-being of human life”である。参加者は1年に30名ほどであり、半数が日本国籍、半数が東京大学に在籍しているが専門分野は経済、医学、政治、国際、生物など多様である。プログラムは通年であり、3ヶ月の集中講義の後、3ヶ月のインターンシップを主に海外で行う。私はカナダ、オンタリオ州のNOSM (Northern Ontario School of Medicine) で医学教育に関わるインターンシップを行った。主な目的は「1. 現地の方法を視察すること、2. リサーチに関わること」であった。

NOSMは北オンタリオに位置する。当地は日本の2倍以上の面積だが、人口はわずか85万人ほどである。彼らの30%は比較的大きな町であるSudburyとThunder Bayに居住し、他は点在する小さな町に居住している。NOSMはSudburyとThunder Bayに存在する総合大学の医学部である。4年制であり一学年は60人あまりで、半数がSudburyで、残りの半数がThunder Bayで学んでいる。1、2年生は講義やPBL (Problem-Based Learning) 形式の小グループ討論、実技練習に参加し、3年生は地域で診療所実習、4年生は基幹病院で実習を行っている。なお、SudburyとThunder Bayは1000km以上離れている。日本の僻地よりも人口密度が低いため、多様な問題に対応できるよう家庭医の育成が求められている。文化面においても、当地はアポリソニヤフランス系の移民が多い地域である。

1年次から移民との交流プログラムを行うなど理解がすすめられている。

リサーチではNOSMのOSCE (Objective Structured Clinical Examination) の責任者を務めたDr. Jacques Abourbihが主導する“Competency-based OSCE”を開発するプロジェクトに参加した。日本のOSCEとの主な違いは1. 各ステーションの最後に各学年に応じた口頭試問をおこなう(例: 低学年には異常所見の列挙や診断を、高学年には治療や管理まで問う。なおシナリオは全学年共通) こと、2. 形成的評価でありその場でフィードバックを行うこと、である。パイロットスタディを行うため、Dr. Abourbihとともに倫理委員会申請書やステーション・口頭試問の作成、標準模擬患者の育成、評価者や学習者のリクルートなどを行った。最終的に、6つのステーションを作り、医学部2年生や家庭医療専攻の研修医の協力を得てパイロットスタディを行うことができた。結果の分析の前に3ヶ月が終了したが、今後も口頭試問の妥当性、ステーションの数、総括的評価への応用可能性などにつき検討する予定だ。

最後に、GLPのメンターの我喜屋先生、受け入れてくれたNOSMのDr. Marsh、Dr. Abourbih、参加を快諾してくれた北村教授に感謝を申し上げます。



▲ 指導医のDr. Abourbihとクリスマス会で

臨床診断学実習 (医療面接実習と共用試験OSCE)

澤山 芳枝 (特任専門職員)・孫 大輔 (講師)

「模擬患者による医療面接実習」は当センターが教材開発と運営に携わっている実習である。学生同士の時とは違い、リアリティのある模擬患者を相手に緊張感を持って臨む貴重な学習の機会となる。医療面接実習は学生グループごとに2回実施されている。2回目の実習では、1回目より改善できていることを実感し、OSCEへの自信をつけている学生も多い。実践的で有意義、他の学生の面接を評価し合えるので良いなど、学生の感想も好評である。

共用試験OSCEは、2014年12月20日に実施された。医学科4年生109名が、6つのステーション(医療面接・頭頸部診察・胸部診察・腹部診察・神経診察・救急)で評価された。本年度は都合により、会場が昨年までの3箇所から1箇所に集約されたが部屋数が少なくなったため、準備も含めると午前7時から午後7時までという長時間での実施となった。

当日はステーションリーダーおよび評価者として教員52名、模擬患者51名(模擬患者つつじの会、医学科3年生・5年生・6年生)、OSCE教務委員1名、医学部事務17名、センター教職員4名が運営に携わった。関係各位に深く感謝の意を表したい。



▲ OSCEの様子(医療面接ステーション)

模擬患者つつじの会

澤山 芳枝 (特任専門職員)・孫 大輔 (講師)

2014年度は新たに8名の5期生を迎え、前半は模擬患者としての基本を学ぶ模擬患者養成コースを実施した。後半は3回の定期勉強会を実施した。

10月の定期勉強会ではワールドカフェという対話形式について学び体験した。ワールドカフェとは、多様な背景の人が大勢集まっても共通のテーマに関して対話を可能にする方法である。今回、テーマはあえて模擬患者に関するのではなく「認知症」のテーマに関して実施した。模擬患者さんからは「自由な雰囲気の中で自由に意見を言えて良かった」、「初めての経験で楽しかった」、「テーマが身近で皆さんの意見が参考になった」などの感想が寄せられた。

1月には「看護教育における模擬患者」と題し、看護の井上京子先生(山形県立保健医療大学看護学科准教授、響き合いネットワーク山形SP研究会代表)を外務講師として招き、「看護とは～看護教育における模擬患者参加型学習」というテーマで講演していただいた。演習では、看護場面での面接におけるシナリオ作成を経験し、参加者は楽しく学習できたようであった。

模擬患者としての活躍の場は、医療面接実習、共用試験OSCE、卒業時OSCEと今後ますます広がっていくと思われる。



▲ 模擬患者つつじの会の皆様と

メアリー・リー先生の教育活動

孫 大輔（講師）・三浦 和歌子（特任専門職員）

クリニカルケースカンファランス

今年度のクリニカルケースカンファランスは、米国タフツ大学からお招きしたメアリー・リー先生に指導していただき、2014年10月より2015年3月まで全11回開催した。ランチタイムの12～13時に入院棟1階のレセプションルームにて開催し、毎回10～20名の研修医や学生が参加した。第8回までの内容を紹介する。

| 回 | 実施日 | 発表者 | 主 訴 | 診 断 |
|---|------------|----------|------------------|----------------|
| 1 | 2014.10.14 | メアリー・リー | 75歳女性 腹痛 | 胸部大動脈瘤 |
| 2 | 2014.10.31 | 研修医 | 68歳男性 背部痛と疲労感 | 膵癌 |
| 3 | 2014.11.19 | 研修医 | 81歳男性 右下肢痛 | 直腸癌 |
| 4 | 2014.11.28 | 医学部生(6年) | 85歳女性 甲状腺機能異常 | アミオダロンの 副作用 |
| 5 | 2014.12.8 | 研修医 | 14歳女性 嘔吐 | カフェインの 過剰摂取 |
| 6 | 2014.12.16 | 研修医 | 78歳男性 下肢脱力 | 大動脈解離 |
| 7 | 2015.1.9 | 研修医 | 46歳男性 意識消失 | 房室ブロック |
| 8 | 2015.1.23 | 医学部生(5年) | 65歳男性 全身脱力感 | 感染性心内膜炎 |

ケースカンファランスでは単に疾患の知識を学ぶのではなく臨床推論の過程を学ぶことを重視している。症例はまず主訴・年齢・性別および現病歴が提示される。そこで考えられる鑑別診断を参加者にもグループワークで考えてもらう。次に既往歴・家族歴など追加情報が示され、さらに鑑別診断を絞り込む。その後、バイタルサイン、身体所見、検査値が示され、その後実施したい検査とその狙いを参加者に問う。こうした過程で、リー先生の指導のもと、論理的に診断に至るプロセス、さらにマネジメントの上での優先順位などを学ぶことができた。症例の発表は研修医だけでなく学生によっても行われるが、発表の前に毎回、リー先生によって内容やプレゼンテーションに関する指導が行われた。また、救命救急センターの園生医師と筆者が中心となり、全体のコーディネート、および当日の教育アシスタントを行った。(孫)

画像診断シリーズ

このシリーズはリー先生により新しく始められたレクチャーで、2014年11月から2015年3月にかけて計6回実施され、毎回10人前後の学生が参加した。対象は、主に臨床医学を学び始めた医学生で、臨床診断の上で不可欠な検査である胸腹部レントゲンや胸腹部CT、頭部CTなどの読影方法の基礎を学ぶものである。第1～2回は胸部レントゲン読影の体系的な方法、またオンライン教材の3D解剖アトラスなどをうまく活用しながら、解剖学的な構造と胸部レントゲンの正面・側面像の対応関係などを深く学んだ。第3回は、各疾患における胸部レントゲン像を学んだ。例えば、右中葉肺炎はレントゲン側面像で後方に見えること、従って身体診察時には側胸部の聴診が不可欠になることなどである。第4回は、腹部レントゲンと腹部CT、第5回は胸部CT、第6回は頭部CTについて、解剖学的な対応と身体所見との関連な

どを学んだ。学生たちはレントゲンやCTの読影方法について系統的に学ぶ機会が少なく、ワークショップ形式で実施された本レクチャーを大いに楽しみながら学んでいたようである。(孫)

リー先生の学外の活動

リー先生は学外での講演にしばしば招かれ、11月に京都大学で国際認証に関する講演を行い、1月末には岐阜大学MEDCのセミナー&ワークショップでタフツ大学における多職種連携教育(IPE)の取り組みを紹介し、2月には北海道大学でオープンコースウェアの講演をおこなった。

年末年始の家族旅行では箱根、京都、奈良、大阪、広島、長崎、そして有田焼で知られる有田を訪れ、日本の風景と建築、食文化を堪能された。さて、和食がユネスコ無形文化遺産に登録されたことは記憶に新しいが、日本の食の豊かさにリー先生は一目も二目も置いていた。アメリカの国民食と言ってもよいハンバーガーでさえ、日本のものの方がお肉の旨みがあって味がまさるといふ。鋭敏な味覚を持つリー先生がそうおっしゃるので、日本の食事がいかに恵まれているかを見直す気にもなる。リー先生は滞在していた湯島天神近くのアパートからほど近い、一見「入りにくい」定食屋(おかみさんが一人で切り盛りし常連客しか来ないようなお店)へ夕食に通うようになり、ほかの常連客とも挨拶を交わすほどであった。「常連」は英語ではregularsというらしい。半年間の滞在中にはほかにも、新能、歌舞伎、東京の下町めぐり、大相撲観戦、お茶席の見学、年明けのバーゲンセールなども楽しまれた。また、日本の焼き物や日本刀、建築を非常に美しいと評された。美術史で修士号を取られている先生に言われると、少々こそばゆいような気になる。日本の文化にこれほど親しんでくださる先生を迎えることができ、迎える側としてこれ以上の喜びはない。本国へ帰られた後も、研究・プライベート両面での交流が続くことを願う。(三浦)



▲ ケースカンファランスで指導するリー先生



▲ 画像診断シリーズで指導するリー先生

メアリー・リー特任教授 離任あいさつ

Mary Y. Lee, MD, MS, MA, FACP (特任教授)

My time at Todai has been wonderfully exciting and fulfilling. I've delighted in having bright medical students ask keen questions while correlating radiologic images with clinical anatomy and classic syndromes. Residents and advanced students have been preparing excellent cases to stimulate active discussions of differential diagnoses and clinical evaluation pathways. For faculty, the Medical Education Seminars have enabled me to interact with others who share a passion for education, not only from Todai but also from institutions across Japan. And having the opportunity to meet Dr. Kimitaga Kaga, an inspirational physician and educator, has been a true privilege.

Personally, I have slowly improved my "survival level" Japanese, which has enabled me to explore less-travelled areas of Tokyo. My family (husband, adult son and daughter) visited over the New Year holiday. We trekked to Hakone (to see spectacular Mt. Fuji), Osaka, Kyoto, Nara, Hiroshima, Arita, Nagasaki, and of course, Tokyo. The memorials at Hiroshima and Nagasaki moved us very deeply and reaffirmed our commitment to peace and justice. In Arita, we felt so welcomed when invited to ring the temple bell at midnight of the New Year, and to share a cup of sake and tea with the head monk. On New Year's morning, the view from a nearby mountaintop of snow-dusted Arita, nestled by mountains, was just breathtaking. And, everywhere, incredible food—we are spoiled forever.

Another rare treat was attending the recent Tokyo Sumo Tournament, and an after-tournament banquet at a sumo beya, thanks to Dr. Kitamura. Attached is a photo of us with the young rising star, Kagayaki zeki. He is special. I'll be excited to follow his progress!

With more educational and personal adventures to come, my last month will race by much too quickly.

With all best wishes for the New Year!



▲ 高田川部屋の力士・輝関、北村教授と筆者

博士課程修了のあいさつ

春田 淳志

東京大学大学院医学系研究科内科学専攻
医学教育国際研究センター 博士課程修了生

学生時代、自分が大学院に行くとは想像もしていませんでした。私は家庭医療の研修を受けるべく東京の中小病院で働き、そこで学び教える機会を得ました。その後同病院での医学教育の理論と実践を振り返る医学教育フェローが大学院の契機となり、翌年に入学しました。博士1年目ではGlobal health leadership programをはじめ、領域を超えて知のシャワーを浴び、そこで専門職連携教育というテーマをみつけ、2年目はがんプロ緩和ケアコースの一環で大学病院や医科研病院で働き、高度医療機関の立場から医療連携を俯瞰しました。その後博士3年・4年は専門職連携をテーマとした文科省のプロジェクトに参加し、学会の委員会活動や国内学会発表をはじめ6回の国際学会発表の機会を得ることができました。振り返るとあつという間の4年でしたが、自分次第で自由に学べること、そして物事を深く探求する虫の眼、全体を俯瞰する鳥の眼、今の流れを把握する魚の眼を養う機会になりました。指導いただいた北村先生、錦織先生をはじめ、センターの方々にはこの場では言い尽くせないほどお世話になりました。このような学ぶ環境を作っていただき本当にありがとうございました。



離任あいさつ

飯岡 緒美

(特任研究員：2010年4月～2015年3月)

薬学部の大学院を修了し、その後、薬学教育での研究と薬剤師の実務を続けてきた私にとって、この研究室で研究させていただくことは、始めて薬学教育や薬剤師を外の視点から見ることができました。医学教育の分野で学ぶ中で、大切な考え方の一つでありながら、薬学教育には余り取り入れられていないリフレクションという考え方を得たことは大きな財産になりました。今後、実務でも研究でも常にリフレクションを忘れない人でいたいと考えています。

この研究室の5年間で、もう一つ大きな出来事がありました。それは科学研究助成事業、基盤研究Cの研究代表者として研究を行えたことです。これまで研究には携わってききましたが、自分が主体となって考え、計画を構築し実施することは初めてでした。多くの先生方、研究室のスタッフの皆様のご協力やご尽力のもとに有意義な研究活動をできたことを大変感謝しております。

今後も、この研究室の客員研究員として、また東京医療センター臨床疫学教室の研究員として、インフォームド・コンセントや多職種連携の研究を続けていく予定です。今後ともご指導を賜れば幸いです。



| 9 SEP | |
|-------------|---|
| 5日(～11月28日) | M2 PBL チュートリアル教育 |
| 16日 | 平成26年度 第5回医学教育基礎コース 「研究倫理の教育」(北村) |
| 17日 | 第5回国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会 |
| 25日 | 第69回東京大学医学教育セミナー 「健康の社会的決定要因を学ぶ地域医療教育」 (武田 裕子先生 順天堂大学医学部 医学教育研究室 教授) |

| 10 OCT | |
|-------------|--|
| 1日 | メアリー・リー特任教授 (米国 タフツ大学医学部 教授) 着任 (2015年3月27日まで) |
| 6日(～12月15日) | 臨床診断学実習 (臨床技能実習) |
| 8日(～12月17日) | 臨床診断学実習 (第2回医療面接実習) |
| 14日 | クリニカルケースカンファレンス第1回 (リー) (3月20日まで全11回) |
| 21日 | 平成26年度第6回医学教育基礎コース 「多職種連携教育 (IPE)」(孫) |
| 21日 | 「模擬患者つづきの会」定期勉強会 |
| 30日 | 第70回東京大学医学教育セミナー (リー) 「タフツ大学のカリキュラム改革とその意義」 |

| 11 NOV | |
|--------|--|
| 4日 | 第4回認証評価から考える医学部教育総合的改革 FD |
| 5日 | 東京大学医学部共用試験 OSCE 説明会 |
| 11日 | 第6回国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会 |
| 12日 | 平成26年度第2回運営委員会 |
| 25日 | 平成26年度第7回医学教育基礎コース 「学習者評価とアウトカム基盤型教育」(大西) |
| 26日 | 臨床診断学実習 (HDPE) |
| 28日 | 第71回東京大学医学教育セミナー (リー) 「Let's Discuss!」医学部学生の学習者評価: 認証評価に向けて」 |

| 12 DEC | |
|--------|--|
| 18日 | 第72回東京大学医学教育セミナー (リー) 「Let's Discuss!」学習者評価 そのII: 学習者評価を継続的改善にどう活用するか」 |
| 20日 | 東京大学医学部共用試験 OSCE 実施 |

| 1 JAN | |
|-------|---|
| 13日 | 平成26年度第8回医学教育基礎コース 「プロフェッショナリズムの教育」(北村) |
| 16日 | 第73回東京大学医学教育セミナー “Let's discuss! Open Education and Its Implications for Medical Education” (宮川 繁先生 マサチューセッツ工科大学 教授/ 東京大学大学総合教育研究センター 特任教授・ メアリー・リー先生 東京大学医学教育国際研究 センター 特任教授) |
| 27日 | 「模擬患者つづきの会」定期勉強会 |

| 2 FEB | |
|-------------|---|
| 2日 | 第74回東京大学医学教育セミナー 「医学教育においてプロフェッショナリズムを 進めるために」 (ジェフリー・ウォン先生 米国サウスカロライナ 医科大学教授 / 平成24年度東京大学医学教育 国際協力研究センター特任教授) |
| 11日 | 第7回国際基準に基づく医学教育認証評価準備委員会 |
| 16日(～2月20日) | 東京大学医学部分野別認証評価 受審 |
| 24日 | 平成26年度第3回運営委員会 |
| 24日 | 平成26年度第9回医学教育基礎コース 「コミュニケーションの教育」(孫) |
| 27日 | 第75回東京大学医学教育セミナー (リー) 「アクティブラーニングを授業や臨床教育に 巻き込むための効果的戦略」 |

編集後記

日増しに春の息吹を感じる今日この頃です。
平成26年度後半は、約1年をかけ準備を重ねられてきた、東京大学医学部分野別認証評価が2015年2月に行われました。約5日間に渡る長丁場で、緊張感あふれる毎日の中、外部評価の先生方と東大・医学部の先生方との真剣な熱いやりとりがとても印象的でした。
次号のお届けは、紅葉の季節の頃となります。皆様のセンターへのご支援・ご協力に感謝いたしますとともに、センターニュースを通じて、センターの日々の活動状況をよりよくお伝えできるよう頑張りたいと思います。引き続き、何卒宜しくお願い申し上げます。(山)

発行元

発行 2015年3月17日
 発行人 山本 一彦
 発行所 東京大学大学院医学系研究科附属
 医学教育国際研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 医学部総合中央館2F
 TEL.03-5841-3583 FAX.03-5841-0254
 E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp
 http://www.ircme.m.u-tokyo.ac.jp
 印刷所 株式会社トライ